

【 5 】

|         |                     |
|---------|---------------------|
| 氏名      | 三谷恵一<br>み たに けい いち  |
| 学位の種類   | 文学博士                |
| 学位記番号   | 論文博第76号             |
| 学位授与の日付 | 昭和47年5月23日          |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当        |
| 学位論文題目  | 初期学習における経験と発達のメカニズム |

論文調査委員 (主査) 教授 園原太郎 教授 野田又夫 教授 池田義祐

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は3部よりなり、第1部ではシロネズミを用いた実験によって初期学習の効果の存在が示され、第2部ではこの初期学習効果のメカニズムが多数の実験によって検討され、これに基づいて第3部で経験と発達の相互関係が考察される。

Hebl-Williamsの回り道問題群を用いて、動物(シロネズミ)を幼少時から1ヶ月間隔で4回テストを経験させると、各回毎に有意にエラーが減少し、学習の効果が示されるに反し、3ヶ月間休止された動物群では、この効果が消失し、成熟後始めてテストされた群では却ってエラーが増加し、通説的に言われている成熟効果は示されなかった(実験1)。

この実験1に示された経験効果が何によるかを多くの実験によって吟味した結果、障害物の背後に回るという視覚運動的経験(ハニ型潜在学習)が重要な効果をもつとともに、問題箱の上の透明ガラス上を走行するだけの視覚的経験のみでも、前者よりは劣るけれども潜在学習効果のあることが確かめられ、且このハニ型潜在学習や視覚的潜在学習が、新しい回り道問題に対する汎化を促進することが証せられた。ブロックの形態の差そのものは必ずしも有意な効果の差を示すものではないが、刺激の型が多様になり、特に動物の運動に対応して多様に変化することが効果をもち、斯る効果は短時間の経験においても作用するが、その消失を防ぐためには持続が必要であり、従って初期経験が効果をもつためには長期に反復されることが必要であると考えられる。

潜在学習に際しての行動の綿密な検討が、探索行動、注意、制止、情緒的反応、一般的活動性にわたって分析され、諸家の理論に照合して検討される。探索行動や情動性とは夫々それだけで潜在学習効果を説明するには不十分であり、注意、制止、一般的活動性が経験と共に急激に高まることから、潜在学習効果は、認知説と刺激反応説との中間に位置づけられ、積極的に第3の定式化の必要があり、著者は、刺激一反応、刺激一刺激、反応一刺激、反応一反応の諸セットが相互関係的に学習の構えのうちに形成されることを仮定すべきであるという。そして、成長と初期経験、それ以後の諸学習が発達の編成をなしてゆくこ

とを論考している。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は極めて周到な配慮の下に、実験に介入する人工的偶然的因子を統制し、必要な場合にはこれら人工的因子を実験変数とした比較実験を行なうなどして、Hebl-Williams open field test におけるシロネズミの初期経験効果の存在を明示し、従来この test においては経験効果は現われないという通説を正した。且この初期学習における経験効果のメカニズムを探求する中で、問題箱の上のガラス越しの走行における視覚的经验のみが、シロネズミにおいても潜在学習の効果をもつことを証したことは新しい知見であって、注目に値する。初期経験効果としてのハニイ型潜在学習とこの視覚的潜在学習の確認に基づいて、従来視覚剝奪実験をもととして立論されていた経験効果についての学説に新しい積極的な視点を加え、行動の発達の編成のメカニズムに対する刺激変化のもつ機能を一層明確にしたことは、重要な寄与として評価される。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。